

私の学び舎 夢の扉

国際医療福祉大学 福岡リハビリテーション学部
言語聴覚学科 3年

木原 良さん



は、武者震いだった。脳科学まで、幅広い知識を吸収しなければならぬ。高校生とき、母の知り合いが、シヨックで話せない状態になり、入院した。母と見舞いに行く。患者が話ができない様を見る。このとき、患者のリハビリを助けるSTが活躍する場面を目の当たりにした。そんな仕事が、職業として存在する、と初めて知った。大学進学を考へるころ、母から「あのSTの仕事はどうか」と提案された。すぐ受け入れた。公立でただ1校、ST受験資格を得られる広島県立大は、競争が激しかった。が、幸いにも地元福岡県に国際医療福祉大がある。STへの第一歩を踏み出した。

1学年の学科定員は40人。6週間の実習を2回、3か月間、キャンパスを出て医療現場に詰めることになる。そのうえで、4年生最後の課業が国家試験。これから1年後、木原さんも当然挑む。

患者に寄り添う STの緊張感

練習しても、それは本番ではないので。実際の患者は、思いもよらぬ反応をするかもしれない。へまをしたら、国家試験どころか、卒業もできないかもしれない。

ものに動じない大らかさの陰には、細心の注意力と温かい思いやりも垣間見える。



カラフルな講義室を見渡す言語聴覚学科フロア(右上)と「ざわめきが好き」という食堂で後輩学生と語る木原さん

国際医療福祉大学は、栃木県大田原、神奈川県小田原、福岡、福岡県大川の4市のキャンパスに6学部を展開。栃木、東京、静岡3都県に4つの附属病院を持つ、医療と福祉を専門とするこの大学で、いま約6千人が学び、すでに卒業生約1万2千人が、医療・福祉現場で活躍している。

福岡リハビリテーション学部のある大川キャンパス

木原さんが目指すSTは、Speech - Language - Hearing Therapistの略。要するに、「話す・聞く」言葉の専門家だ。木原さんによると、これに「食べ」るも対象に加わる。言葉を話せない、口から音が出ない(失語症、構音障害)、どもる(吃音)、食べ物を飲み下せない(摂食嚥下障害)などから、自閉症や落ち着きがない(注意欠陥多動性障害)など、現

宝くじは、地方自治体の公共事業等に幅広く使われています。



宝くじの収益金は、病院や検診車、図書館や動物園、災害に強い街づくり、緑あふれる公園、美術館など、皆様の暮らしに役立てられています。